

とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

(事務局及び会報) 〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継

Eメール kmat27aiko@gmail.com

携帯電話 09061674553

☆ 第 33 号

☆2025年(令和7年)

5月20日 発行

★ 八木重吉詩集、待望の岩波文庫に入る！

岩波文庫『八木重吉詩集』誕生

荻部 幹 央

茅ヶ崎市美術館前の高砂緑地にある「八木重吉記念碑」は2005年10月2日に建立された。2015(平成27)年10月4日に行われた「八木重吉記念碑建立10周年」に「八木重吉記念碑を建てる会」の代表として建立にご尽力された川合盛次先生から講演のご依頼をいただいた。〈八木重吉における「こころ」と「かなしみ」〉と題して、その時の資料に「私の八木重吉に関する忘備録」を添えた。それは16項目もあり、最初の「1『定本八木重吉詩集』との出会い。1959(昭和34)年、高3の夏、姉の書棚から、何となく取り出して手にしてみる。その巻頭にある桃子を抱えている八木重吉の清らかで寂しそうな孤独な写真に心ひかれ、ページをめくっていくうちに詩の世界にひきつけられていく」から始まり、最後の「16「生誕120年」までに『八木重吉詩集』が岩波文庫から出版されることが私の夢である」で終わっている。

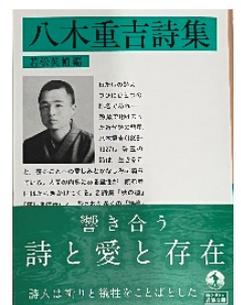
私は毎月、岩波書店の『図書』を心待ちにしている。送られてくると、まず最終ページの次月の新刊案内を開く癖がいつの間にか付いてしまった。2025年1月号を見開いて〈2月刊行予定本〉若松英輔編『八木重吉詩集』岩波文庫2月14日刊)を発見した時の喜びは言いようもなかった。私の「16」の夢が実現したのである。私は1か月半じっと待っていた。2月14日の午後、書店の文庫コーナーにすぐに行った。そこには『八木重吉詩集』(岩波文庫)があった。そこだけが輝いているように見えた。手にして文庫の帯に「響き合う 詩と愛と存在 詩人は祈りと犠牲をことばとした」とあり、なにか新しい八木重吉に出会ったように感じた。目次を見ると『秋の瞳』と『貧しき信徒』は完全収録、残された多くの「詩稿」は全体の約半分以上も占めていて内容も豊富である。さらに、キーツとブレイクの「訳詩」も載っている。ただ残念なことは「年譜」に紙幅を残しているのに、〈昭和33(1958)年4月『定本 八木重吉詩集』(弥生書房 吉野秀雄編)と 昭和34(1959)年12月『新資料 花と空と祈り』(弥生書房 吉野登美子編)〉の2行が入っていないことである。

若松英輔氏の「解説」は、私が今まで読んできた解説の中で最も心に響くものがあった。特に「うつくしいもの」は私の鑑賞に深みを与えられた。今までになく納得感があり、考えさせられることが多くあった。

わたしみづからのなかでもいい／わたしの外の せかいでも いい／
どこにか 「ほんとうに 美しいもの」は ないのか／それが 敵であっても
かまわない／及びがたくても よい／ただ 在るということが 分かりさえすれば／
ああ、 ひさしくも これを追うにつかれたところ (『秋の瞳』)

私は心疲れた時など、「うつくしいもの」の詩の世界に戻っていく。若松英輔氏は次のように語っている。〈彼は稀有なる抒情詩人として、あるいはキリスト教詩人として語られる場合が多いが、彼は常に深いところで探求していたのは「在る」ということ、存在の秘儀そのものだった。世界が在る、時が在る、一輪の花が在る。自己が在る。「在る」ことの神秘が彼の念頭を去ることはなかった)そして〈彼の詩はまだ十分に哲学的には繙かれていない〉と言われ、北村透谷の「内部生命論」に基づいて、さらに〈彼が哲学書を耽読したのではない。彼の詩が哲学を内包しているのである〉と指摘され、私は目から鱗が落ちる思いであった。

八木重吉には「かなしみ」の詩が実に多い。それは、旧約聖書学者として名高い関根正雄氏が、「想起の詩人」(1967年2,3月号 月刊キリスト)の中の「(一) ことばからみた重吉詩の特質」で「さびしい」「さぶしい」「わびしい」が全体の約4,5%である。「かなしい」が10,1%で161回も用いられ、これがいちばん多いと書かれていることからでもよくわかる。私は長年、重吉の「かなしみ」について考え続けてきた。長女桃子が生れ、重吉25歳、とみ18歳、二人は幸福な日々を〈この虹を見る わたしと ちいさい妻 / やすやすと この虹を讃めうる / わたしら二人 きょうのさいわいのおおいさ〉という恵まれた世界を「虹」と題して詩にしている。しかし、吉野登美子は当時を振り返って



この詩を読むたびに私と八木と二人して立ちつくしていた御影の自然を思い出す。でもこの詩稿のすぐあとに綴りこまれているこの詩「はらへたまってゆく かなしみ」を読むとき、あの平安であった日々のなかで八木をひたしていた「かなしみ」とは何だったのだろうと、しきりにおもわずにはられない。（『琴はしずかに一八木重吉の妻として』弥生書房）と回想している。

かなしみは しずかに たまってくる／しみじみと そして なみなみと／
たまりたまってくる わたしの かなしみは／ひそかに だが つよく 透きとおって ゆく／
こうして わたしは 痴人のごとく／さいげんもなく かなしみを たべている／
いづくへとても ゆくところもないゆえ／のこりなく かなしみは はらへたまってゆく （『秋の瞳』）

若松英輔氏は「詩人とは / かなしみのひと / 詩こそは / かなしきよろこび」の詩について、〈ここでいう「かなしみ」は人間である宿命の異名である。それは悲しみ、哀しみであるだけでなく、愛しみ、美しみでもあるのだろう〉と言われる。さらに、〈重吉は「わたし」の悲しみだけでなく、さまざまな「かなしみ」を生きた。そうでなければ彼が「ひとつに 続ぶる 力」を希求する必要もないのである〉とはっきりと八木重吉の「かなしみ」について語っている。「悲」「哀」「愛」「美」で表す重吉の「かなしみ」は、「人間である宿命の異名」なのである。八木重吉の数多い「かなしみ」の詩がなおいっそう心に染み入り、また「なぜそんなに」というモヤモヤした思いが晴れたような気がする。「かなしみ」についての数多くの著作のある詩人であり評論家の若松英輔氏の編になる『八木重吉詩集』岩波文庫出版は、八木重吉の近代文学の詩人としての評価が定まった出来事である。

★ YOEN（ヨーエン）さんの重吉詩の歌唱活動続く！

「YO-EN ライブ『詩人 八木重吉を歌で紡ぐ』」開催される

十松弘樹(国立・ギャラリー・ヒブリア)

4月12日(土)、「YO-EN ライブ『詩人 八木重吉を歌で紡ぐ』」が開催されました。YO-ENさんは：毎年の「茶の花忌」でもおなじみのシンガー&ソングライターです。重吉の詩に曲をつけてギター弾き語りで歌う活動をライフワークとして展開しています。会場は東京・高円寺の築100年の木造長屋を改装したシェア型古書店「本の長屋」。奇しくも重吉が詩作に励んでいた時代の建築です。主催は児童書教育書出版社の株式会社マイティブック。出版界に多くの知己を持つマイティブック社長の松井紀美子さんがたくさんのお客を集めてくれました。ほとんどが「初重吉」で「初YO-EN」と思しき方々でした。18時開演。前半はカバーやオリジナル。「高円寺」を意識した昭和歌謡や酒場歌を時にしっとりとし時に激しく熱唱しました。

休憩をはさんでの後半は八木重吉ライブ。サプライズで登場のフリーアナウンサー、原きよさんによる「心よ」朗読に続いてYO-ENさんは茶の花忌ライブより少し多い全10曲を歌い上げました。曰く「貫く光(『秋の瞳』より)」、「うたうときは(『花と空と祈り』より)」、「まり(『鞠とぶりの独楽』より)」、「わたしはわるい人間だもの(『花と空と祈り』より)」等々。初披露の「新曲」もありました。「今まですでに14曲作っても自分の中で“まずはいったん終了”と思っていましたのに、詩集を読んでいたらまたメロディが降りてきてしまいました」とYO-ENさん。「草はうつくしい」という曲です。重吉を知る人も知らない人も高い書棚に囲まれた文学的空間でたっぷり重吉の詩7世界に身を委ねYO-ENさんの歌声に酔いしれる約2時間でした。あとでわかったことですが、ずっと重吉が好きでインターネットでこのライブの開催を知って来てくれた若い女性もいました。

YO-ENさんは「こんな時代だからこそ少しでも多くの人に重吉さんの世界を知ってほしいです。私にできることは重吉さんの詩を曲にして歌うこと。これからも機会があったら各地で歌いたいと願っています」とその意気込みを語ってくれました。このライブの様子は近々YouTubeチャンネル「YO-EN 流」にてダイジェストで公開予定です。ご期待ください。

<https://www.youtube.com/@yo-en4345>



草はうつくしい
なにゆえ草はうつくしきか
みずからのすべてみずからによりて
つくられしゆえなり
なにゆえにんげんはうつくしからぬか
みずからならぬものみずからのうちに
あるゆえなり
いっぽんのくさのうるわしさは
ひとつのはのおのうるわしきにかよう
くさの葉のそのかたちは
つくりぬしのころながるる
そのすがたなり
(八木重吉無題詩より)

★ 案内

1 八木重吉全集の編者、詩人田中清光展「慈愛の詩人田中清光—戦後 80 年の追想—」 開催中！

主催／公益財団法人 八十二文化財団

会期 2025 年 5 月 13 日(火)～6 月 8 日(日)＊会期中無休＊入場無料

場所 長野市岡田 178-13 八十二別館 1 階 ギャラリー82

概要 本展では、詩人・文筆家であり、また絵画作家でもある田中清光氏（長野県松本市出身）をご紹介します。会場には、詩文や短歌に加え、水彩画（デカルコマニー）作品などを多数展示し、様々な分野で多彩な才能を発揮した田中清光氏の作家人生を振り返ります。また、戦渦に巻き込まれ、会社員生活（元八十二銀行員）を送りながらも、強い信念で自身の創作活動を全うし、鋭い感性で見つめ続けた戦後 80 年を追想します。さらに、会期中は、田中清光氏ご本人のご出演によるギャラリートークを 2 回（人数制限あり）開催します。著名劇団員やアナウンサーによる朗読に加え、新進気鋭の演奏家によるフルート演奏などを織り交ぜながら、「田中清光の世界」を存分にご堪能いただけます。

作家在廊予定日 ・5/13 (火)・5/14 (水)・5/17 (土) ギャラリートーク・5/18 (日)・5/31 (土) ギャラリートーク
・6/1 (日)・6/7 (土)・6/8 (日) ＊在廊時間 13:00～15:00 (予定)

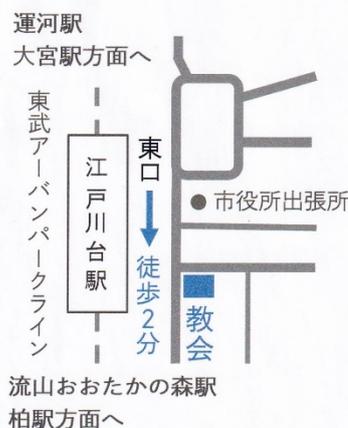
2 朗読劇「八木重吉の世界—詩と生涯」の発表会！

日時： 6 月 22 日(日)13 時 30 分～14 時 30 分。

場所： 千葉県流山市、日本キリスト合同教会江戸川台教会

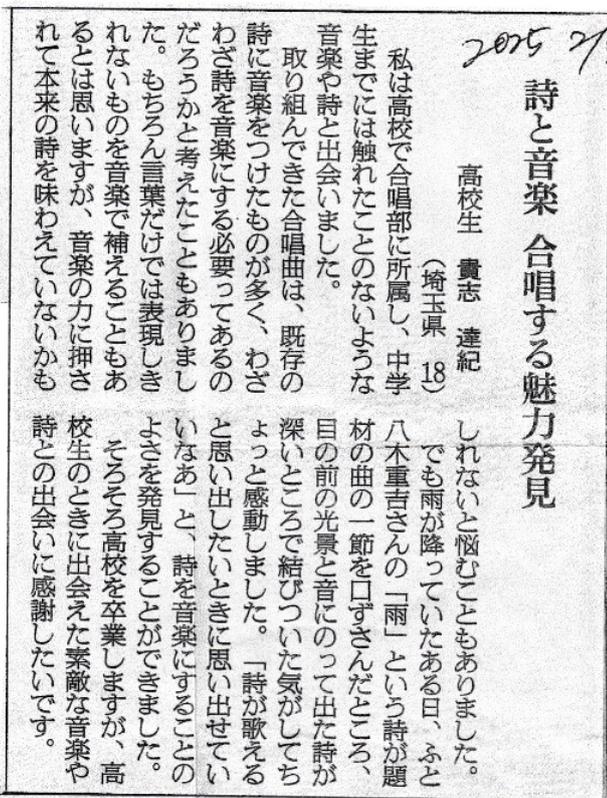
(東武アーバンパークライン江戸川台駅東口徒歩 2 分) [04\(7154\)5070](tel:0471545070)

入場： 無料 50 席。電車での来場をお願いします。



★ 新聞記事紹介

朝日新聞朝刊 2 月 3 日 (佐藤イツ子さんより提供)



雨

雨のおとがきこえる
雨がふっていたのだ

あのおとのようにそっと世のためにはたらいていよう
雨があがるようにしずかに死んでゆこう

(詩稿「母の瞳」1925〔大正 14〕年 9 月 17 日編)

＊今年の茶の花忌開催に向けて準備をスタートさせます。昨年提示しましたように、今後の方向は「愛好者たちが作る茶の花忌」です。愛好者仲間は、訪問客であると同時に主催者として、内容を盛り上げるために協力と奉仕をしてほしいのです。意見をお寄せください。
(事務局 小林)

★ 「三浦綾子読書会」の皆様から愛好会に寄付金を頂きました！

3 月に北海道の旭川市から八木重吉記念館を訪れた「三浦綾子読書会」(代表森下辰衛様)の方々が、記念館のためという事で 1 万を越える寄付金をくださり、生家の佐藤ひろ子様、それなら茶の花忌を主催することになった愛好会に送って下さいと言われ、事務局の小林宛に送ってきました。感謝して使わせて頂きます。

★亡くなられた八木重吉の愛好者たち（最近わかった故人）

1 小川宣二さん（1922 年生まれ）

小川宣二さんは、茅ヶ崎の早くからの八木重吉愛好者で、柏に愛好会が出来て交流が出来ると、多くの資料を提供して下さい、柏のように、茅ヶ崎にも詩碑を建立したいという願いをもちつつ、茅ヶ崎文化人クラブ中心に茅ヶ崎市にも働きかけていました。私の親に当たるくらいの年齢にもかかわらず、年の割には元気で若く活動されていましたが、やがて後輩の活動に期待しながら、穏やかに休養される生活になって行き、その過程で、歌人で重吉愛好者の川井盛次さんが詩碑建立運動を進めて下さるようになり、平成 17 年に高砂緑地に詩碑「蟲」が建立され、小川さんも出席して下さい、非常に喜んでいました。しかし 90 歳を超えたあたりから、なかなか顔を合わせる事も無くなり、こちらが出す便りに返答も途絶えてしまい心配していました。

このままでは生死もわからなくなってしまうと思い、私があえて茅ヶ崎の愛好者たち、とくにリーダーとして働いて下さっている川井盛次夫妻に、今年の 2 月 6 日（木）「小川さんの消息を確かめてもらえないか」とお願いしたところ、数日して川井盛次さんの奥様から電話がありました。小川さんが最後に入っていたと思われる介護施設に電話して下さり、もうその時点ではその施設からは出られていたということで、かろうじてわかった小川さんの娘さんに連絡を取ったところ、小川宣二さんは、2022 年に 99 歳 2 か月の生涯を終えていたという事でした。



そして家にはまだ八木重吉関係の資料がたくさんあり、娘さんがそれらを捨てることはしていないということだったそうです。娘さんには資料の価値もわからないので、しかるべきところがあれば引き取ってもらってかまわないとのことだったそうです。川井さんとしては茅ヶ崎に「人物館」という、有名人の資料を所有している館が有るので、そこの学芸員に話して、ひきとってもらい保存してもらえればと思っているとのことでした。それがだめの場合、とりあえずは娘さんには資料を捨てないようにお願いし、その資料をどうするか茅ヶ崎の愛好者たちと私とで、早い機会に何とかする方法を伝える方向で行こうと決めました。

3 年前に 99 歳ということは、1922 年（大正 11 年）生まれということになり、八木重吉が神戸の御影で結婚した年に当たります。長い間、八木重吉を愛し、いろいろ活動し、多くの資料も集めて来ていました。私も何度も手紙と貴重な情報を提供していただきました。神様に愛された八木重吉愛好者だったと思います。茅ヶ崎の詩碑建立の礎を作った愛好者として、いつまでも私たち愛好者の記憶に残っていくと思います。小川宣二さん、本当に有難うございました。

2 石原忠興さん（1940 年生まれ）



滋賀県長浜市在住の石原忠興さんは昨年亡くなりました、現代作曲家の一人ですが、音楽活動中心に絵も描いていました。日本の仏教音楽の響きの中で僧侶の息子として育ちました。国立音楽大学を 1966 年に卒業。卒業後は 12 音楽を学び、日本のクラシック楽器と声楽の集中的な研究をし、1984 年から 1986 年まで、アメリカのハーバード大学とニューイングランド音楽院に留学し、そこでジョージ・ラッセルの影響を受けました。晩年は国立音楽大学教授として、オーケストレーション、作曲、音楽理論等を教えていました。その過程で八木重吉の詩と出会い、ホームページで愛好会を知り、連絡をいただき、それ以降愛好会の会報を送っていました。高齢で重大な病気であることを察していましたが、最期まで精力的に活動しようとしている姿が便りの文面でわかりました。インターネットで検索してみると非常に博識で深い研究をしていた音楽家だという事がわかりました。仏教者にも、音楽家にも愛される重吉の詩ですが、石原さんの深い芸術の心とも共感するものがあつたのだと思いました。奥様から CD を 2 枚寄贈されました。その他以下のような作品の（一部）があります。石原さんの偉業をあらためて知りました。

オーケストラのための作品→1970 年 ジョハキユウ for Orchestra 1973 年:ガカ・フォー・オーケストラ
吹奏楽のための作品→88 年:ウィンド・オーケストラ No.2 - サバンナ ウィンドオーケストラのための動き
室内楽→1969 年:フルート・エ・ピアノフォルテによるムジカ '69

1972 年:パーカッションアンサンブルのためのタペストリー

ピアノ音楽→ Little Suite1971 年 リトル・スイート・フォー・ピアノ

書籍と執筆→1987 年:音楽理論を教えるための視点 1992 年:音楽形式入門

1993 年:ポピュラー音楽における音楽構造の相関 1995 年 ソニックデザイン Robert Cogan and Pozzi Escot

1998 年 Maurice Ravel モーリス・ラヴェルの秘密の芸術:『ボレロ』におけるエクスタシーとグラデーシヨンの構造

2001 年:ナッコラーニの「第 24 紀楽賞」のパガニーニのテーマ分析に関する研究